

## 限界革命の起源

### 一 問題提起

ジェヴォンズ、メンガー、ワルラスの三人がほぼ同時にかつ独立に、限界効用学説を発見した一八七〇年代初期をもって、限界革命の成立を説くのが学説史上の通説である。しかしながら、革命後一〇〇年を経たいまになって、はたして一八七〇年代初期を革命成立の時期としてとらえるのが適切かどうか、あるいは、革命はいったいあったのかなかったのかといった問題が論ぜられるのはどういうわけであろうか。<sup>(1)</sup> 通説を当然のこととして容認してきたわれわれにとって、それはきわめてシロッキンクな問題提起ともいえよう。

だがよく考えてみると、こうした疑問が出てくるのは

美濃口 武雄

当然であるともいえる。なぜなら、第一に、限界革命という用語そのものがあいまいで、なにをもって限界革命の内容とするのが明確でないし、第二に、限界革命をもたらしした要因、換言すれば限界革命の起源について、これまでに与えられてきた説明が、どれもあまり納得のゆくものではないからである。

限界革命という言葉自体、いったいだれが最初に、どのような意味で用いたのか明らかではないが、限界主義 *marginalism* という言葉が、限界効用学説、限界生産力説の双方を包括する経済分析の方法をあらわす用語として使われ出したのが、J・A・ホブソンの『労働と富』 *Work and Wealth*, 1914. であることを想うなら、『限界革命』もまた比較的新しい言葉であることは間違いないか

らう。<sup>(2)</sup> その意味で、革命の内容や革命の起源についての統一的定義や研究がじゅうぶんにおこなわれていないのは当然であり、それだけに限界革命の成立についての疑問が生じてくるのである。

本稿は、革命の起源について在来の見解にとって代わるような新しい見解を示すことが目的ではない。ねらいはむしろ限界革命の成立についての疑問の所在を上記二つの点に求め、それぞれについてこれまでの見解を整理することにある。

(1) たとえば Belaggio conference にあける Mark Blaug の論文 "Was There a Marginal Revolution?" *History of Political Economy*, Fall 1972. 参照。なおこの論文のオリヂナル・タイプは "There Never Was a Marginal Revolution." である。

(2) Richard S. Howey, "The Origins of Marginalism," *History of Political Economy*, Fall 1972, p. 282. なお本誌を以後 HOPE と略称する。

## 二 限界革命の意味

限界革命というとき、革命の内容をどうみるかによって、革命成立の時期について異なった解釈が出てくるの

はけだし当然である。

ところで限界革命は、一般には限界効用革命としてとらえられることが多い。もう少し一般的には、それは古典派の客観的価値論から主観価値学説への転換を意味するものと解してよからう。この立場から眺めれば、限界革命トリオの展開した学説は、まさに革命の名に値いしそうにみえる。しかし主観価値学説、ないし効用又は使用価値学説は一八七〇年代に初めて唱えられたわけではない。カウダーにしたがって、その起源を紀元前のアリストテレスにまでさかのぼるとすれば、主観価値学説はゆうに二千年をこえる歴史をもっているとさえいえる。<sup>(1)</sup> ただギリシャ哲学からヘドニズム的側面だけをとり出し強調するのは正しくない。そこには古典派の生産費説や公正価格 *justum pretium* についての考え方を同時にうかがうことができるからである。そこでもっぱら効用又は利用によって価値を説明する学説に限定してみよう。それでも、中世のヨアネス・ブリダヌス (1295—1366) を初めとして、一六世紀のロッチェーニ、ダヴァンザッティ、一七世紀のモンタネリ、一八世紀のガリアーニ、チュルゴー、コンディヤックなどを次々と指摘できるの

である。<sup>(2)</sup> しかも主観価値学説をよりせまく限定して、たんなる効用ではなく、限界効用の意に解釈しても、一八三〇年代のロイド、ロングフィールド、シーニョアをあげる事ができるし、<sup>(3)</sup> さらに限界効用の発見のみならず、その消費者行動への適用にいつその限定を試みても、デュビュイ(一八四四)、ゴッセン(一八五四)、ジュニングス(一八五五)の名をあげることができる。<sup>(4)</sup> したがって主観価値学説、あるいは限界効用学説のいずれをとろうと、それはジェヴォンズ、メンガー、ワルラスによって新たに発見されたのではなくして、再発見されたという方があたっている。さらに言葉の厳密な意味で、限界効用をはじめて唱導した学者をあげるなら、それはウィザー(一八八四)、ウィックステイード(一八八八)までまたなければならなくなる。<sup>(5)</sup> かくして主観価値学説又は限界効用学説の発見という立場からすれば、限界革命を一八七〇年代という特定の時期に位置づける理由はなくなるのである。

そこで限界革命を古典派価値論のみならず、古典派経済学説一般の崩壊し始めた時期とする解釈をとったらどうであろうか。この立場から限界革命の成立を唱くのは

ハチソンである。<sup>(6)</sup> とりわけイギリスにおいては、一八六〇年代後半から七〇年代にかけて、当時の正統派であった古典派経済理論の中心をなす、賃金基金説あるいは自然賃金の理論に対し、次々と反撃が企てられた。この反撃に参加したのは、ロンヂ、クリフ・レスリー、フリーミング・ジェンキン、ソレントン、マクレオド、ウォルター・バジョット、ジェヴォンズなどであったが、結局それは一八六九年、フォートナイト・レビュー誌上でのミルの賃金基金説の撤回——いわゆる Mill's recantation——にみちびいたことは周知の事実である。シェンペーターのいうように、当時にあつては「賃金基金説をやっつけることは、お気に入りスポーツだった」<sup>(7)</sup> ののである。

古典派の価値と分配の理論一般の否定的かつ破壊的局面をもって革命と定義することは、したがってイギリスの場合には妥当する。しかもこの考え方は、後述するようには限界革命を学問体系内部の知的・自律的な発展の結果とする内因説に結びつくものがあり、その意味でかなりの説得力をもつようにさえ思われるのである。しかし、もし内因説をとるなら、賃金基金説批判は自ら、賃金の限界生産力説にみちびいたはずなのに、事實はジェヴ

オンズの限界効用学説の発見という方向にすすんだのは理解しがたい。しかも以上の説明は、イギリスの場合についてのみあてはまるのであって、ウーインやローザンヌでは情況は異なっていた。先ずメンガーの場合であるが、当時のオーストリアでは、イギリスとはちがって、スミス・リカードオ流の古典派経済学は学界を支配していなかったから、当然のことながら、古典派の生産費説・賃金基金説などの価値と分配にかんする理論に反撃を企てる必要もなかった。もちろん、メンガーが当時のドイツ歴史学派と派手な論争を闘わしたことは事実であっても、歴史学派そのものはシュモラーに典型的にうかがわれるように、経済史の細目の研究に専心したのであって、理論面から彼等に反駁すべきものはなにもなかったといつてよいであろう。基金説についていえば、タウシッグの指摘するように、すでにそれは一八三二年にヘルマンによってくつがえされ、以後オーストリアでは基金説はまったく支持を失なっているのである。<sup>(8)</sup>メンガー自身はカウダーの指摘のように、ゴッセンやマンゴルトの学説を知らなかったとしても、メンガーの限界効用学説の再発見は、理論面では当時の学説の流れにそうもの

であつてその意味ではおよそ革命とはいえないのである。同じことはローザンヌにおけるワルラスにもあてはまる。ワルラスは価値の決定にあつて、効用と稀少性を強調するフランス経済理論の伝統から出発しているのであつて、その源流は、コンデイヤック、J・B・セイにまでさかのぼることができる。『要論』のなかでワルラスは、フランス正統派の価値論と自らの価値論のちがいを強調して次のようにのべている。「経済科学は価値の起源という問題に三つの主たる解答を与えた。第一のものは、アダム・スミス、リカードオ、ならびにマカロックのものであり、英国派の解答であつて、価値の起源を労働に見い出すものである。この解答はあまりにせますぎる。なぜなら、それは本来価値のあるものに価値を与えることができないからである。第二の解答はコンデイヤックとJ・B・セイのものであり、フランス流の解答であつて、価値の根源を効用に見い出す。ただこの解答はややひろきにすぎ、本来価値をもたないものにまで価値を与えてしまう。最後に第三の解答は、ブラマキや私の父、A・A・ワルラスのものであり、それは価値の起源を稀少性 rareté にみい出すものである。これこ

そ正しい解答である。<sup>(9)</sup>」ワルラスの限界効用学説もまたその意味でフランスの伝統にしたがうと同時に、それをのりこえるものであったが、決して革命的な性質を帯びたものではなかったといえよう。もちろんワルラスにも反抗心はあったが、それは父オーギュスト・ワルラスや彼自身が学界にあって比較的恵まれぬ境遇におかれたことに対するものであったし、さらにそれは数学の経済学への適用についての学界一般の冷たい空気に対するものであったといえよう。

そうなると古典派理論の破壊的局面をもって革命成立の時期とするハチソンの見解は、イギリスについてはなるほどといえるし「経済思想のなかにあって、これほど明解かつ重要な事例はない」<sup>(10)</sup>のではあるが、大陸については革命を語ることは困難とならざるを得ないのである。

限界効用学説の発見という見地からしても、また古典派理論の否定的・破壊的局面という立場からしても、一八七〇年代を世界的にみて革命成立の時期とみなし難いことは以上でのべたとおりである。それではいつをもって革命成立の時期としたらよいのであろうか。すで

に限界効用学説の発見に限定したとき、それが一八三〇年代にさかのぼりうることを指摘した。しかもこのときより七〇年代までは、まさに限界効用学説再発見の歴史が絶え間なく続くのである。この事實は、ジェヴォンズ『理論』の改版(一八七九)における先駆者の文献リスト、ならびに後に令息ヘンリー・ジェヴォンズによって補充された第四版の付録をみれば一目瞭然である。したがって主観価値学説一般ではなく、限界効用学説に限定するとすれば、それは発見の多発性 multiple discovery という見地からは、一八三四年のロイドとロングフィールドによる総効用と限界効用の峻別を初めとして、一八七四年のワルラス『要論』の出版の年までの四〇年間を革命成立の時期とする見解も成り立ちうる。このような解釈は同時的発見という意味ではやや長すぎると批判されるかもしれないが、まだ経済学が社会科学の一専門分野として十分に確立しておらず、国際交流もほとんどなかった当時の状況からすれば、あえて同時的発見といっても過言ではないであろう。このような主張は、科学的発見一般についてのマートンの考え方に負うものである。彼はほぼ同時的な発見に多発性の概念を限定せず、「た

とえ曆の上でたがいにかげ離れた発見であっても、学問的には同時的と解釈してよい<sup>(11)</sup>としてゐる。ただ、プログの指摘するように、一八三四年から一八七四年までの歴史は、発見の多発性の存在によって、科学の状態がどのようなものであったかを推測可能にはするが、しかし反対に科学の状態から多発性の必然性を予見可能にするものではない。これでは科学の発展が予見可能であるとはいえなくなり、多発性理論の魅力は失なわれてしまふであらう<sup>(12)</sup>。しかしこの予測可能性の問題に立ち入るには、革命の意味を語るだけでは不十分であり、革命の起源についての考察が必要になつてくるのである。

(11) Emil Kauder, *A History of Marginal Utility Theory*, 1965. Princeton, pp. 15—16.

(12) Emil Kauder, *ibid.*, pp. 17—29.

Joannes Buridanus, *Quaestiones in decem libros Ethicorum aristotelis ad Nichomachum.*

Gian Francesco Lottini, *Aueudimenti Civili*, Venetia, 1574.

Bernardo Davanzati (1529—1606). See Enrico Bindi (ed.), *Le opere di Bernardo Davanzati* (2 vols.; Florence: Monnier, 1852)

Geminiano Montanari (1633—87), "Della Moneta,

(69) 限界革命の起源

Trattato Mercantile," *Scrittori Classici Italiani de Economia Politica*, Parte antica, Vol. III (Milano: Destefanis)

Abbé Ferdinando Galiani (1728—1787), *Della Moneta*, 1750 or 1751.

Anne Robert Turgot (1727—81), "Valeurs et Monnaies," *Oeuvres de Turgot*, ed. Daire (Paris: Guillaumin, 1844)

Etienne Bonnot de Condillac (1714—80), "Le commerce et le gouvernement," *Oeuvres complètes de Condillac* (Paris: Honel), 1798.

(13) William F. Lloyd, "A Lecture on the Nature of Value," Oxford, 1834.

Mountfort Longfield, *Lectures on Political Economy*, Dublin, 1834.

Nassau W. Senior, *An Outline of the Science of Political Economy*, London, 1836.

(14) E. J. Dupuit, *De la mesure de l'utilité des travaux publics*, 1844.

Richard Jennings, *Natural Elements of Political Economy*, 1855.

Hermann Heinrich Gossen, *Entwickelung der Gesetze des menschlichen Verkehrs und der daraus fließenden Regeln für menschliches Handeln*, 1854.

- (5) 限界という用語はジエヴォンズ・メンガー・ワルラス共に用いていない。ジエヴォンズの場合、限界に相当する用語としては、*final degree of utility*, *final utility*, *terminal utility* など、メンガーでは、*importance of the least important of the satisfaction*, ワルラスでは、*rareté*, the intensity of the last want satisfied である。初めて経済学の文献に限界という言葉が効用に關して使われたのは、Friedrich von Wieser, *Ursprung* (1884) である。Grenznutzen という表現が出てくる。イギリスでは、Philip H. Wicksteed, *Alphabet* (1888) が最初である。cf. Richard S. Howey, "The Origin of Marginalism," *HOPE*, 1972, pp. 296—297.
- (6) T. W. Hutchison, "The 'Marginal Revolution' and the Decline and Fall of English Classical Political Economy," *HOPE*, 1972, pp. 442—468.
- (7) Schumpeter, *History of Economic Analysis*, p. 671.
- (8) F. W. Taussig, *Wages and Capital*, p. 266.
- (9) Leon Walras, *Elements of Pure Economics*, trans. W. Jaffé (1954), p. 398.
- (10) Hutchison, *ibid.*, p. 467.
- (11) R. K. Merton, "Singletons and Multiples in Scientific Discovery," *Proceedings of the American Philosophical Society* 105, no. 5 (1961) p. 486.
- (12) Mark Blaug, *ibid.*, p. 273.

### 三 限界革命の起源

限界革命の起源に関する研究を大きくわければ、内因説と外因説ということになるが、前者に属する見解として、①経済学内部における知的・自律的發展説、②宗教的・哲学的思考の産物説、また後者に属するものとしては、①経済界における一定の制度的変化の産物説、②社会主義、とくにマルクス主義への反駁説、などが指摘できよう。なお両者の中間的な説明としては、最近ジャン・フェが異常な努力を傾けているバイオグラフィカルな研究をあげておこう。<sup>(1)</sup>

限界革命の起源は、もしもそれが経済学内部における、知的・自律的な發展にみい出せるなら、まことに都合がよしし説得的でもある。先に紹介したハチソンの考え方は、まさにこの立場に立っていた。ところで古典派の考え方の欠点は推論の前提となる仮定の非現実性にみい出ることができる。とくに基金説はその前提として、労働の同質性を仮定し、一定の賃金基金をこの同質な労働者数で割った商として一人あたりの賃金の大きさが決まるという考え方であったが、それはまた労働価値説の基礎

(71) 限界革命の起源

にもなっていた。なぜなら、投下される労働の質のちがいを無視することによって、生産物の価値は投下労働量によって説明できるからである。しかし、バジョットの指摘するように、スミス・リカードの時代のように発展のテンポがおそく単純労働が生産の多くを占めていたときには、そのような仮定は許されても、熟練労働が次第に要求され、高度な技術が生まれるようになってくると、同質性の仮定は許されなくなる。<sup>(2)</sup> 言葉を代えていえば、労働市場における需要関数、供給関数は安定したものではなく、気ままに変動するものであったのである。古典派の賃金論が現実を説明しえず、そこからみちびかれる価値論が説得力を失なったとき、古典派経済学説への攻撃が開始され、新たな理論の誕生をうながしたことは首肯できよう。しかも六〇年代中頃にはじまった攻撃が、ミルの基金説の撤回によって勝利を収めたのは六九年であったから、その速さからみてまさに革命の名に値いするであろう。しかしこうした内因説の難点は、それを大陸に適用しにくいことにある。メンガーもワルラスもイギリスの学界におけるように、古典派の絶大な支配下のもとにはなかったからである。ハチソンのいうよ

うに、当時の学界には「世界市場、否ヨーロッパ共同市場さえもなかったものであり、英国市場だけが正統派の独占的支配下にあったのである」<sup>(3)</sup>。

では、第二の哲学的・宗教的産物説ほどの程度の説得力をもちうるであろうか。カウダーは一九世紀以前の使用価値説論者の大多数が、フランス人とイタリア人であること、それに対して費用理論の擁護者の多くがイギリス人であることに着目し、それが決して偶然ではないことを、宗教的・哲学的な立場のちがいから説明する。<sup>(4)</sup> もともと価値論の源流は、それが主観価値説であれ、労働価値説であれ、アリストテレスに求められるのだが、それはアリストテレス学派のなかに、価値論についての二面性があったからであった。そのうち一方の公正価格 *justum pretium* にかんする考え方が、公正価格は交換にあたって、財にふくまれる労働量が同じであるときに実現されるといふ労働価値説に発展してゆくのである。しかしそれは同時に、カルヴァンのピューリタニズムとも結びつき易い考え方であった。なぜならカルヴァンは、神学の中心に労働をすえ、神の栄光のためのたゆまなき労働を礼讃したからであった。労働を讃えるには、労働

を価値論と結びつけるのが最善の方法であり、かくして価値は労働価値となり、それは、たんに交換比率を計算するための科学的方法であるばかりか、神の意志と日常の経済生活を結びつける絆とさえなしたのである。スミスの労働価値説は、いうなればピューリタンの社会哲学と、伝統的なアリストテレス価値論との結合から生まれてきたのである。したがって、イギリスにおいてカルヴァン派のピューリタニズムが支配したことは、労働価値説を生むための思想的基盤を与えたことになる。これに対してイタリアやフランスではどうかであったか。これらの諸国はもっぱらカソリックが支配的であったし、社会哲学もまたアリストテレスの価値論から快樂主義的側面だけを抽出していた。当時のカトリシズムもまた、労働よりは近代的快樂追求を賞揚していたのであって、ここにヘドニズム的な価値論、すなわち効用価値学説の生まれる素地があったことはたしかである。ジェヴォンズの場合にも苦痛と快樂の計算においては、ベンサム哲学のえいきょうを受けていたのであって、主観価値学説がヘドニズムと結びつけられるという主張は、その意味でも説得力をもつ。だがカウダー自身の指摘するごとく、

ノースロップやミュルダールのように「限界効用は快樂主義的な苦痛と快樂の計算の特殊な適用である」と決めることは、一九世紀の限界効用学説の発見を説明する場合には危険である。なぜなら、ワルラスもメンガーも——とくにメンガーは——快樂主義的計算を拒否していたし、宗教的心情からしても限界効用学説の発見者であるロイドやロングフィールド、シーニョアはプロテスタントであり、ゴッセンは反カソリック教徒であったから、一八世紀までの図式はそのままでは一九世紀には適用できないのである。いうなれば、この世紀の経済学者はもはや彼等の宗教的心情とは無関係に学説を展開したといつてよいだろう。<sup>(5)</sup>ただ限界効用学説のその後の普及の速さを見ると、イタリア・フランスでは比較的スムースに普及していったのに対し、イギリスではかなりの時間を要したことについては、以上の見解はある程度の説明力をもつものといえよう。

さて以上の内因説に対して外因説はどうであろうか。外因説の最初ものは、社会階級間の関係の変化、ならびに資本主義経済の変質に着目する。ところで、賃金基金説によれば、利潤が増加し、したがって労働者のため

の生存基金が増加すれば、雇用は拡大し生活水準は向上するはずであった。このような意味において穀物法の廃止は地代の騰貴を抑制し、利潤の低下を防ぐから、当時においては地代の騰貴こそが資本家・労働者の共通した課題であり、階級対立は旧地主階級と新興都市階級との間にみられたのである。すなわち穀物法の廃止による地代騰貴の抑制↓利潤増加↓基金増加↓雇用機会の拡大(又は生活水準の向上)というチェーンの成り立つかぎりにおいて、労働者階級と資本家階級とは共存の関係にあった。しかるに資本の蓄積は単純な基金の増加ではなくして、労働者に代わる機械の採用を可能にし、かえって失業者が生まれ、それが労働市場を圧迫して賃金は低下し、ここに失業と貧困という矛盾が資本の蓄積にもかかわらず出現したのである。ここに到って、階級対立は資本家対労働者という新たな装いのもとにあらわれてくる。次に、資本主義経済の変質、換言すれば規則的な景気変動あるいは周期的な恐慌の発生があげられなければならない。さて、スミス・リカードの体系にあっては、価格は自然価格をめぐって求心的な運動をくりかえすのであり、経済もまたつねに安定的な自動調節機構の働き

によって、自然の調和にみちびかれると考えられていた。しかしながら経済の発展にともない、それまで恐慌といっても、農業上の不作、政府紙幣の濫発、ナポレオン戦争の終結といった外部事情によってひきおこされた偶発的かつ部分的な恐慌から、次第に周期的、全般的な恐慌に変わってくるのである。例えば、一八一〇、一八一五、一八一九年の恐慌が部分的なものであったのに対し、一八二五年のそれは英国全体におよぶものであり、さらに一八三六―七、一八四七年の恐慌は一層規模を拡大し、ついに一八五七年のそれは英、米、独、仏の世界的規模にまでおよぶようになる。こうした周期的かつ一般的な過剰生産は、自然的調和を旨とする古典学派の体系によっては説明できない。ここにもまた古典派経済学解体の外因的理由を見い出すことができる。しかし以上にのべたことは、あくまでも古典学派解体の事情であって、ここからただちに限界効用学説が擡頭すべき必然性を見出すことはできない。杉本教授も指摘するように、主観価値学派はこの点でもっとも危機意識のうすい学派であって、それは逆にいえば、外的事情の変化によっては限界革命を説明できないとするに等しいのである。

では最後に、限界主義がデカダントなブルジョア階級の消費慣習に対するプロパガンダであり、共産主義に対する中産階級の闘争のための武器であるとする、ニコライ・ブハーリンの見解を吟味してみよう。彼は限界効用学者をブルジョア階級の手先として非難する。彼にとってマージナリスト、とりわけオーストリア学派の経済学者は「すでにその社会的機能を失なってしまった寄生虫的な、そして、乗馬や高価な敷物や、香りの高いタバコ、トカイ産のブドウ酒などに関心をもつブルジョア階級の心理だけを」<sup>(8)</sup>叙述しているにすぎないとしている。だがそれは真実の描写というよりは過度に戯画化されたものであるし、「飲食に関心をもつのは富裕な資本家だけであろうか。より下層な階級ほど豊かな階級よりは、より生存のための必要性に関心をいだくのではなからうか。限界効用は社会階級のいかに問わず、全ての消費者の行動に適用できる」<sup>(9)</sup>のである。さらに限界効用学説がマルキシズムへの挑戦のための武器として登場したとする説に対しては、なるほどヘームやウイザーが新しい理論をマルクス経済学への攻撃に利用したことは認めるとしても、一八七〇年代の限界革命の発見の動機を説明

することはできない。なぜなら、マルクスの『資本論』の初版は一八六七年だが、一八八七年までそれは英訳されなかったし、少くとも一八八〇年までは一般的な議論の対象とはならなかった。これに対して、ジェヴォンズにしろ、ワルラスにしろ、メンガーにしろその出版の時期はともかくとして、理論の形成期にはマルクスについて耳にすることもなかったのである。限界効用学説がマルキシズムに対する挑戦として登場したという考え方が説得力をもたないことはいうまでもない。

- (1) William Jaffé, "Léon Walras's Role in the 'Marginal Revolution, of the 1870's,'" *HOPE*, 1972, pp. 379-405. なお、ナイオン・ラフ・カル・ナ・ブローチの意義は、G. J. A. W. Coats, "Retrospect and Prospect," *HOPE*, 1972, pp. 613-618. を参照せられた。
- (2) Bagehot, *Economic Studies*, ed. R. H. Hutton, (1855), p. 262.
- (3) Hutchison, *ibid.*, pp. 443-4.
- (4) Kauder, *ibid.*, pp. 3-14.
- (5) C. Northrop, *The Meeting of East and West* (New York, 1946), p. 131. Gunnar Myrdal, *Das Politische Element in der national-ökonomischen Doktrinbildung* (Berlin, 1932), pp. 125-127. 引文は Kauder, *ibid.*,

(75) 限界革命の起源

p. 12. による。

- (6) その例外は、古典派経済学と主観価値学説との総合を企てたマーシャルであり、カウダーはタルコット・パーソンの示唆によって、マーシャルがカルヴァン主義の復興運動としての福音主義 Evangelicalism の強いえいきょうを父からうけているとしている。「カルヴィニズムは、その福音主義のもとにあっけいせん強く、限界効用的接近を最少限のものとしたのである。」Kander, *ibid.*, p. 11.
- (7) 杉本栄一『近代経済学史』五二頁。
- (8) Nikolai Bukharin, *The Economic Theory of the Leisure Class* (New York, 1927), p. 25.
- (9) Kander, *ibid.*, p. 60.

四 結 語

以上われわれは、限界革命の意味と革命の起源について従来の見解を整理し、そのどれもが一八七〇年代の限界革命をかならずしも世界的な規模では説明しえないことを明らかにした。おそらく限界革命という用語は、ケインズ革命に対するものとして、経済学史家がつくり出したものであろうが、少くとも一八七〇年代というように限定するならば、それは歴史家の虚構であり、学説史を展開するための便宜上の工夫であるにすぎない。ケ

インズ革命がきわめて実践的な問題と深いかわりを持つていたのに対し、限界効用学説がそうした問題とほとんどかわりなく、偶発的に登場したことが革命の必然性についての理解を困難ならしめている最大の要因であることには異論がなからう。とすれば、限界革命の起源は例のアダム・スミスの水とダイヤモンドの例にうかがわれる使用価値と交換価値とのパラドックスに意外にも求められるかもしれない。なぜなら学問の進歩は往々にしてクイズ解きからはじまるからである。メンガーもワルラスも当初はジャーナリストとして活躍し、その間に市場の価格現象が古典派の費用理論では説明がつかぬことを痛感したといわれている。ジェヴォンズの場合にはまさにアダム・スミスの提起した問題に正面から解答しようとしている。もちろんクイズを解く鍵を限界効用学説に見い出すということは、容易ならざることであるにちがいない。しかし、天才的なひらめきによってクイズを完全に解き明かしたとき、そこに思考上の革命が成り立つという見解はあまりにも単純すぎるであらうか。

(一橋大学助教授)